

クルマエビさいごの放流!!

(はじめに)

昭和 56 年以降長年にわたって続けてきたクルマエビの種苗放流は、資源管理に向けた網目拡大の取り組み、種苗生産過程での PAV 等の病気の問題、目に見えた放流効果の発現等にかかわる諸般の社会的情勢から、本年度境港支所の放流（境港地先、淀江地先）を最後に終了することになりました。これまで多くの漁業者の方、県民の方にご協力いただいたこと、心からお礼申し上げます。



図 9 囲網の設置作業

(近年のクルマエビ放流方法)

放流したクルマエビの生き残りを少しでも高めるため、センターでは少しずつ放流方法の改善をおこなってきました。種苗放流を開始した当初は、平均体長 30mm の種苗を直接放流していました。しかし、種苗が食害される危険が高かったため、食害を防ぐ目的で放流する場所を約 2 週間程度網で囲って、その間に食害魚から逃避できる潜砂等の能力をつけさせる、いわゆる“囲網馴致放流”に変更し、しばらくの間はその方法で実施してきました。



図 10 夜間放流作業の様子

この囲網馴地放流は、シケ等により囲網が破損する状況がたびたび起こったことから、これに代わる新たな放流方法が求められ、食害生物が夜間には活動が鈍ること、低密度に放流すると被食が

回避されること等から、平成 16 年以降、現在実施している“夜間低密度放流”に切り替えて放流を実施してきました。また、種苗の大きさも小型（体長 30mm）より、より大きい方が食害生物からも逃避できるため、大型サイズ（体長 50mm）での放流を推奨してきました。

(クルマエビの放流効果)

センターでは、クルマエビの放流効果を数値として把握するため、クルマエビの身体にメスで切れ込みを入れて、漁獲されたときに放流したクルマエビと分かるように目印を付けました。クルマエビは成長とともに脱皮を繰り返すので、通常の標識が使用できないため、しっぽの先端（尾扇）を切除することにより、切除した部分がいびつに再生していく状態を利用しました。この方法は、体長 5cm 以下の種苗には不向きなため、体長 5cm 以上に成長させてから人海戦術で実施し、毎年 10 万尾程度標識放流してきました。



図 11 クルマエビの尾鰭カット

放流後、翌年の春以降漁獲サイズまで成長したものは、美保湾周辺で操業する小型底曳き網漁船により漁獲されるので、漁船を一隻ずつ回って、漁獲されるクルマエビが標識放流したものかどうか 1 尾ずつ確認し、放流効果を算出しました。

平成 15 年から尾扇除去による標識放流を実施してきたので、翌年平成 16 年以降、延べ 71 回の市場調査で、測定尾数 2,049 尾中、放流個体は 71 尾に上り（混獲率 4%）、高い効果が認められました。

こうした効果を認めながらも、クルマエビの漁獲量は減少し、費用対効果の面では採算が合わないことから、今回の中断に至ったところですが、今後も本県沿岸海域の状況を勘案しながら、クルマエビの栽培漁業の復活を願うばかりです。